

# もっとも贅沢な楽しみ

谷川直子



谷川直子

作家 神戸市出身。高橋直子の名前で競馬エッセイ、海外競馬ルポ、ファッション評論、小説など幅広く活動。訪ねた海外の競馬場は30以上。05年から五島列島に移住し谷川直子と改名した。『競馬の国のアリス』『ステイゴールド物語』など著書多数。最新刊は電子ブック『ゆうべ不思議な夢を見た』。MBSの携帯サイトで「馬?あいにいきませす!」を連載中。



秋の京都といえば、なにはさておき菊花賞だが、菊花賞はイギリスの三冠レースのひとつセントレジャーステークスに範をとったと言われている。セントレジャーの舞台となるのはイギリス中部にあるドンカスター競馬場で、毎年9月初め、芝の1マイル6ハロン312ヤード(約2937M)に3歳馬が挑む。コースは一周3000M以上の洋ナシ型で、じつに広々とした競馬場である。

私がそこを訪れたのは8月で、ドンカスター駅から乗ったバスの運転手に「競馬場で降りるから着いたら教えてね」と何度も念押ししたところ、「日本のお方、競馬場に着きましたよ!」と競馬場前のバス停でアナウンスをされ、他の乗客に拍手で送り出された。おかげで一緒のバスを降りて競馬場へ向かう人たちに親しげに話しかけられ、日本から一人で来たと言うと「セントレジャーでもないのに」

とまた笑われたが、楽しい一日だった。

今年イギリスでは、シーザスターズという馬が二千ギニーとダービーを勝ち二冠を達成している。そこで注目されたのが、シーザスターズのセントレジャーへの出走の可能性だった。じつにイギリスでは1970年のニジンスキーを最後に38年間三冠馬が誕生していない。三冠達成をファンは待ち望んでいるのである。しかしシーザスターズを管理するオックス調教師は、「(血統的に短距離色の濃い)ケーブクロス産駒が3000Mを走るのは非現実的であり、勝っても将来的に有益とは思えない」と出走に否定的なコメントを出して、ファンをがっかりさせている。

スピードが重んじられる競馬界の世界的傾向の影響で、長距離レースを勝っても種牡馬としての価値は上がらないという現実があり、近年セントレジ

ャーの地位はかなり低下している。日本でも同じように、菊花賞の距離を短縮してはどうかという意見も出ている。それもしかたがないのかなと思う一方で、菊花賞の最後600Mのスリルは、決して他では味わえないものだ、とも私は思うのだ。未知の領域に踏み込んでいく緊張感の中、最後の最後に発揮される馬たちの驚くべき潜在能力。それを目の当たりにすると鳥肌が立つ。それが三冠を賭けた戦いとなればなおさら興奮を抑えられない。万能であることは、真に特別であり、あくまでも美しい。

もしも英国二冠馬シーザスターズがセントレジャーに出走するとなれば、ナリタブライアンやディープリンパクトを京都へ応援しに行ったように、私はドンカスターへ飛んでいこう。三冠馬の誕生を目撃するのは、競馬の最も贅沢な楽しみだから。